

第7回日本語教育セミナー in 西安

教育・学術および文化の国際的な振興に関する事業
第17回 陝西省大学生日本語弁論大会・日本語教育事業

●日時：2010年12月11日（土）

日本語教育セミナー in 西安（午後1時より）

●会場：西安交通大学 外文楼

●共催：社団法人 全国日本学士会

陝西教育国際交流協会

西安日本語教師会

●後援：国際交流基金会（日本）

京 都 府

京 都 市

京 都 外 国 語 大 学

名 古 屋 外 国 語 大 学

中国教育国際交流協会

陝 西 省 教 育 庁

京 都 新 聞 社

財団法人 経済広報センター

西 安 日 本 人 俱 楽 部

●協賛：株式会社 内田洋行

作文添削の実際

名古屋外国語大学 日本語学科長 教授
中 道 真木男

作文の執筆という学習活動は、学習成果の全般を総合的に反映します。そこで活用される知識は、記述する情報内容の適切さ、十分さ、内容の配列の適切さ、視点の取り方や読み手に対する配慮の適切さなどから、語彙、文法、表記といった言語要素の適切さ、正しさといった広範囲にわたります。作文の際にはこうした多くの面にわたる知識を利用するので、それは非常に効果的な学習でありえますが、それだけに、書かれた作文には、これらすべての面における問題が混在しているので、問題点を見つけて修正、改善することは非常にむずかしいものになります。学習者の作文を前にして、どう直していいかわからないと感じることもしばしばあると思います。

このワークショップでは、文章作品を構成する要素にどのようなものがあるかを考えたうえで、いくつかの作文例を観察して、その問題点を修正、改善することを試みます。検討の対象として、日本人学生の作文と中国人留学生の作文を取り上げます。

受身の学習における困難点について

京都外国語大学 日本語学科 教授
森 本 順 子

中国語母語話者が日本語を学習する場合の困難点の一つとしてあげられるのが受身表現である。受身文の代表的な形式は、他動詞文の目的語が主語に変換されるものだが、日本語では、さらに「雨に降られた」「子供に泣かれて困った」のような受身文も作られる。これらの文の動詞「降る」「泣く」は目的語を持たない自動詞である。このタイプの受身文は母語の違いに関わらず、どの日本語学習者にとっても難度の高いものになっている。しかし、問題はそれだけではない。上級レベルになっても、日本語学習者の作文には、「あの映画に感動された」のような不自然な受身がみられる。また、日本語の「北京で会議が開催された」は自然な受身文であるが、中国語では受身では表現できないというような相違も指摘されている。

今回は、日本語と中国語で受身になりやすいもの、なりにくいものに焦点を当てて、演習を通じてどのようにすれば理解しやすくなるか考えていきたい。

日本語ライティング能力の向上を目指して

京都外国語大学 日本語学科 教授
由井 紀久子

インターネットや電子メールなどの普及に伴って、日本国外で日本語を学んでいる人たちも文字媒体による日本語を使う機会が増えてきました。教室での作文はうまく書けるのに、メールや留学書類などがうまく書けない人は結構います。これは、教室で書く作文は、対人性や場面性が考慮されていないことに起因しています。

初中級、上級の学習者が実際使用の日本語のライティング能力（プロフィシエンシー）を向上させるには、どのような教材でどのように指導していけばいいのでしょうか。セミナーでは、実際使用場面における場面認識のしかたと言語表現の結び付きを中心にライティングについて考えていきたいと思います。奨学金書類や、就職活動における自己PR文や友人との携帯メールなど、実際に留学生が使用する場面におけるライティングを題材にしたいと思います。

実践的な日本語の話し方向上の授業デザイン —協働学習を取り入れた活動—

名古屋外国語大学 日本語学科 講師
阿部 新

近年の日本語教育の流れとして、「学習者中心」という考え方が広がっています。これは、言語構造を教師が学習者に教えるという方法とは異なり、学習者の自律性を重視し、学習者のニーズに沿って学習内容を決めるという方法です。このような教育観を持った授業では、教師の役割は知識を伝達することではなく、学習者の自主的な学びを引き出すサポート役となります。学習者の学びをサポートする際に授業デザインとして取り入れられるのが協働学習です。

セミナーでは、この協働学習の考え方を元にした学習方法のうち、主に「ピア・レスポンス」に焦点を当てて、日本語の話し方を扱う授業にどう取り入れるかということを考えていきます。ピア・レスポンスとは、授業内での活動をペアやグループで互いに評価し合い、コメントを出し合って、自他にフィードバックして、今後の活動に活かす項目を各自が学習していく活動です。ごく簡単なスピーチでも、プレゼンテーションでも、インタビューなどの対話的な活動でも、発表を観察する側がそれを評価し、そこで気付いたことを自分の発表に活かすようにしていく方法を実際に体験していただき、考えていきたいと思います。

MEMO
